

朝日地球会議2019

朝日地球会議2019は、10月14日から3日間にわたり都内で開かれましたが、直前に記録的な大雨をもたらした台風19号の直撃がありました。予定通り開催できるか危ぶまれたほか、海外からの登壇者の飛行機が軒並みキャンセルとなり、到着日の変更や代替機の手配など、これまでにない緊張感に包まれました。国内の交通機関も不安定になり、登壇者が会場にたどり着くまで心配が続きました。10月半ばになって、これほど大型の台風に見舞われるとは。これこそ地球規模の気候変動ではないか、と実感しました。



もうひとつ、特筆すべきこととしては、期せずして初のオンライン中継をしたことです。独ポツダム気候影響研究所理事のヨハン・ロックストローム博士が、台風ではなく家族の事情で来日ができないと、直前に連絡があり、ドイツから Zoom で中継し、成功しました。

いまでこそ、新型コロナウイルスの影響で多くのイベントがオンライン配信となっていますが、それに先駆けることになりました。



ポツダムのオフィスから登壇した気候変動問題の世界的第一人者、ロックストローム博士は、キャスターの国谷裕子さんと対談し、「化石燃料に依存する最終日を決めるべきだ」と提案しました。その後、会場に集まった小、中、高、大学生からの英語の質問にも答え、国谷さんの手腕のおかげもあり、アンケートには「ネット越しであることに違和感がなかった」と綴ってくれた方が多く、胸をなで下ろしました。

4回目を迎えた地球会議は、国連の「持続可能な開発目標(SDGs)」に全社、グループ会社を挙げて取り組んでいることを、国内外にアピールする場としても定着し、趣旨に賛同してくださる協賛企業数も協賛金も目標を上回りました。来場者は、のべ5000人にのびりました。

4回目を迎えた地球会議は、国連の「持続可能な開発目標(SDGs)」に全社、グループ会社を挙げて取り組んでいることを、国内外にアピールする場としても定着し、趣旨に賛同してくださる協賛企業数も協賛金も目標を上回りました。来場者は、のべ5000人にのびりました。

#MeToo 運動など世界の様々な動きから、「多様性のない地球に持続可能性はない」ことを訴えたいと考え、メインタイトルを「ひらかれた社会へ 多様性がはぐくむ持続可能な未来」としました。若者に人気のりゅうちえるさん、ハヤカワ五味さん、ヨッピーさんが登壇し、多様な生き方や働き方を一緒に考えました。

世界経済フォーラムのジェンダーギャップ指数で10年連続1位のアイスランドからは、女性権利協会事務局長のブリュンヒルドゥルさんを迎えました。男女平等が徹底されたかのようにみえるアイスランドも、1970年代ごろまでは女性議員比率は1割にも満たなかったこと、どのように声を上げ今にいたったか、いまだ克服されていない問題は何かなどを語ってくれました。最終日には、障害を持つ人も持たない人たちも一緒に踊るブレイクダンスのセッションで盛り上がりました。

朝日新聞社は2020年4月1日に「朝日新聞社ジェンダー平等宣言」を発表しましたが、そのなかで、地球会議も数値目標をかかげました。登壇者について、2030年までに男女どちらの性も40%を下回らないことをめざします。朝日地球会議2019の女性登壇者割合は35.8%で、10年前の朝日地球環境フォーラムが7.3%だったことと比べると、格段の進歩です。しかしながら、世界的に知名度のある研究者はいまだ男性が多く、目標の実現は決してたやすくはありません。意識的に女性登壇者を発掘していきたいと考えています。

(フォーラム事務局マネジャー・中村うらら)